



鐘の音

NO. 35

(かねのね)

秋田大学教職大学院 2025.5.30

はじめに

今年度は新しく教員の皆様を3名、現職院生の皆様を10名、学部卒院生の皆様を14名迎え入れ、昨年度に引き続き和気藹々とした雰囲気の中で学びや研究に勤しんでおります。

さて、第35号では、新たに教職大学院の一員となった皆様を中心に、素敵な原稿をたくさん頂戴いたしました。どうかお楽しみくださいませ。

教職大学院への入学おめでとうございます

教職実践専攻（教職大学院）

専攻長 佐藤 修司

さあ、これから1年間ないし2年間の冒険のはじまりです。長く険しい道のりかもしれませんが、たどり着いた山の頂から見える景色は、さえぎるものもなく遠くまで見渡せるとても素晴らしいものであるに違いありません。この山の頂というのは、教職修士（専門職）という学位や、専修免許状であり、そこから見える景色は、これから新たに始まる教師としてのみなさんの未来、スクールリーダーとしての未来の風景でしょう。

みなさんにとって、山の頂と、そこに至る山道とではどちらがより大きな価値があるのでしょうか。私が思うに、より重要なのは山の頂に至るまでの山道なのではないかと思えます。山の頂は、達成感はあるとしても、下山のこともあるでしょうし、次の冒険への出発点として、不安も伴います。山道はどうか。確かに上り坂は苦しい思いを多くするかもしれませんが、山道で培われた知力や体力や精神力は、次の山に登るための力、つまり、次の困難に立ち向かうための力となり、さらに、誰かの困難を救う力になるはずで、また、山道を助け合いながら苦楽をともにして、一緒に登ってくれる仲間たちとの出会いや絆は何ものにも替えられない、かけがえのないものです。たとえ、今後、働く場所が

離れて、めったに会えなくなっても、どこかで気に掛けてくれていて、何かあれば助けにきてくれるに違いありません。

同じ空間で、同じ時間で、同じ経験をして、同じ記憶を共有していること、その記憶を貴重な意味のあるものとして、大事にしたいという思いを共有している人たちが仲間なんだと思います。例えば、知らない人の誕生日は自分にとって何の意味も持ちませんが、好きなタレントだったり、家族だったり、仲間の誕生日であれば、とても大事な意味を持ちます。私たちは、この広い世界の中で、何の偶然なのか、また何の必然なのかここで出会って、人生の中のかげがえのないひとときを共に過ごし、ともに悩み、ともに成長していくことになりました。この1年間ないし2年間でみなさんにとって忘れ得ない素敵な記憶となり、これからの人生の確固とした礎となることを期待しています。



学び続けること

教職実践専攻（教職大学院）

教授 柘植 敏朗

この春、ご縁があり秋田大学でお世話になることとなりました。想像だにできなかった母校の大学での勤務は、所々に懐かしさが残るキャンパスの雰囲気を感じつつ、学生当時とは全く違う教育環境の変化に戸惑うことが少なくない毎日です。しかしやる気に満ち溢れた表情の院生・学生の皆さんや、懇切丁寧に対応してくださる周りの教職員の方々に救われて日々過ごしております。高等学校教員の退職を機に職場環境が劇的に変わったわけですが、この機会をポジティブにとらえ気分を一新してこれからがんばっていこうと思っております。

私は高等学校に36年間勤務しましたが、教育現場の大変さに関する情報が年を追うごとに多くなってきました。教職大学院には、これから教員の世界に飛び込もうと考えている人、あるいは一度職場を離れて学びを深めている人が在籍しているわけですが、皆さんがこれから身を置く職場環境が働き方改革という号令のもとで改善されていくことは良いことだと考えます。そうした社会の潮流はありがたいことですが、一方で教員のやりがいなどももっと取り上げていただきたいですし、ブラックといわれることの多い部活動にもすばら

しさがたくさんあります。そうしたこともお伝えできればと考えています。

私が入学したのは昭和の終わり頃で、入学して2か月目に起きた日本海中部地震では大学構内でも建造物等に被害が出た記憶があります。その頃とはうって変わって院生・学生の皆さんが真面目なことに感心することしきりです。皆さんには教員になった際に自分の専門といえる何かを持って学校に飛び込んでいただきたいと願っています。その専門性が子どもたちに与える影響は小さくはありませんし、何よりも教師自身のやりがいや誇りにもつながると考えるからです。学生時代を通じて何かを極めそれを持ち込んで武器にしたり、あるいは働きながら極めていくことが大事だと思います。私も学び続けることを忘れずに過ごしていこうと考えておりますので、これからどうぞよろしく願いいたします。



未来を託す

教職実践専攻（教職大学院）

特別教授 長門 里香

縁あって4月より、実務家教員として教職大学院でお世話になっております。未だ緊張しながら右往左往している毎日ですが、以前ご一緒し、お世話になった方も複数名いらっしゃり、たいへん心強く感じているところです。新たなミッション

を遂行すべく、一日でも早く慣れるようにと努めながら、気付けば2か月となりました。

3月まで勤務していた小学校には、教職大学院修了者を含む採用一桁年の若手の先生が多く、チームワークとフットワークで学校を活性化してく

れていました。電話は必ず1コール、素早い来客対応、時機を逸することのない情報共有等々、常に機動力と活気がありました。また、長期休業明けには、競い合うようにどの教室もセンスのよい黒板アートやクイズで、子どもたちにサプライズを仕掛けたりしていました。放課後、自学級の子どものことを語る際には、内容にかかわらず最後には必ず笑顔で、「明日がある」という未来志向の粘り強さを感じさせてくれました。子どもたちは、一生懸命関わってくれる先生のごことが大好きで、校長室は担任自慢をしたり、先生に「ごめんなさい」と言う練習をしたりする場となり、教室に戻る背中を愛おしく見送ることが常でした。

学校が抱える問題が多様化複雑化する中、不安を煽るかのようの一部切り取られたネガティブな情報ばかりが流れてきますが、実際の学校では、たくさんの心温まるドラマが、それぞれの先生の下で日々繰り広げられ、子どもたちは未来の担い

手として成長し続けています。担任やリーダーの即戦力として、1年後、2年後に各学校で活躍するであろう大学院生の皆さんを、きっと筋書きを超えてくる珠玉のドラマが待っているはずですよ。その日まで、この教職大学院で研究を深めながら自らの持ち味を磨き続け、力を蓄えていただきたいと思います。私たち教職大学院の教員は、未来を担う子どもたちに直接関わることはできませんが、高い志をもった皆さんの背中を押しながら、未来の担い手づくりの一助となれたら嬉しく思います。これからどうぞよろしくお願いいたします。



「きたえ志」、「チーム」に支えられて

教職実践専攻（教職大学院）

客員教授 田口 武美

4月から秋田大学教育文化学部附属教職高度化センターにお世話になっています。実に38年ぶりに母校の秋田大学に戻り、「リフレクション」等を通じて、院生の皆さんと一緒に学び活動することができ、充実した日々を過ごしています。

教員生活の中で、一番長くお世話になった学校には、その地域が生んだ劇作家、金子洋文氏の「荒海や 吹雪にきたえ志 港魂」の精神が脈々と受け継がれていました。ここでの経験が、私の教員生活に大きな影響を与え、最後まで全うすることができたと考えています。

「きたえ志」とは、強くなにもものにも負けない根性や優しく他を思いやる心で、荒波に揉まれながらも、確かな志をもって前進するという意味が

あります。厳しい環境の中で育まれる忍耐力や困難を乗り越える力、挑戦する精神は、教育の本質とも深く結びついています。自分自身も、「きたえ志」をバックボーンとして、実践を積み重ね、新たなことに挑戦しながら成長してきたと感じています。

また、中学校での教員経験を通じて、「チーム」の重要性を強く実感しました。教育は決して一人で完結するものではなく、教師、保護者、地域社会が一体となって子どもたちを支えることで、より良い学びの環境が生まれます。

私が教員として働き始めた頃、授業の準備や生徒指導に追われ、すべてを自分一人でこなそうとしていました。しかし、ある時、同僚の先生や保

護者、関係機関等と連携することで、生徒の問題をより深く理解し、適切な対応ができることに気が付きました。

このことから、「チーム」の大切さを実感し、子どもたちの多様なニーズに対応することを心掛けました。

「早く行きたいなら一人で行け、遠くへ行きたいならみんなで行け」という言葉があります。教育の世界も同じです。皆さんと仲間と共に学び、支え合いながら、より高い志のもと、自分の目指

す将来に向かって、私自身も更に成長していきたいと思っています。



1年生

学校マネジメントコース
現職院生1年次 澁谷 礼子

「1年生のみなさん」まさか自分がこの歳になってそう呼ばれるとは！人生何が起きるか分からない2025年春の始まりでした。

いくつになっても「どきどきの1年生」です。人見知りや恥ずかしがり屋の私は「なじめるかな。どんな人たちと1年過ごすのかな。」と、早速新入生の気持ちを味わいます。現職院生との出会いがあり、お世話になる先生方との出会いがあり、そしてストレートマスター略してストマスと呼ばれる学部卒院生との出会いと、たくさんの出会いがありました。そんな中でちょっぴりの不安はあっという間に消え、「新しい日常」を楽しんでいます。

まず「学ぶことは楽しい」ということです。自分が勉強不足だったことや新しいことを知ることだけではありません。校種や年齢を超えた仲間と、テーマや課題について話し合う大学院での学びは、正にアクティブラーニングです。現場にいる時、話し合う活動では生き生きとする子どもが多い、ということを感じていました。自分が学生となって授業をうける立場になると、なぜ子どもが生き生きとしていたのかが分かってきました。

目的をもって話し合う中で、自分の理解度や感情や思考の偏りを認識できたり、対話に積極的に参加できているか建設的な議論に貢献できているかななどの自分の貢献度を感じたりすることで、自分の存在を実感できることが理由の一つではないかと思います。

大学院では、リフレクションも大切にしています。振り返り、次の学習につなげるこの活動は、単なる意見交換や情報共有に留まりません。より深い理解や洞察、そして学習能力そのものの向上へと繋がるという想像以上の効果に驚いています。もう一つは「新しいことに挑戦することが楽しい」ということです。今自分の周りには、幅広い分野に精通した仲間や先生がいます。一人では挑戦できなかったことでも、やってみようという気持ちになります。こんなに恵まれた環境はありません。大学院に来てよかったと心の底から感じています。



教職大学院に入学して

学校マネジメントコース
現職院生1年次 萩原 亨

4月5日(土)に晴れて秋田大学教職大学院に入学した。卒業後30年経ち、また同じ大学の学生になるとは、全く想定外である。式典が終了し、仲間たちとの写真撮影のために屋外に出た。そこには、自分が「大学生」になったときと同様、部活動・サークルの方々が熱心に勧誘活動を行っている姿があった。当然ながら私を勧誘する人は皆無であった。

次の週のガイダンスを経て、本格的に講義が始まった。事前に仲間と共に時間割を検討し、科目登録は間違いはないはずである。前期だけで10コマ以上の講義を受けることになるが、どれも学校現場において重要な、喫緊の課題となっているテーマである。はじめの一週間が過ぎて一通り1回目の講義が終了して感じたことがある。

一つは「教わるのではなく学ぶのだ」ということである。講義にあたり、担当される先生方があらかじめ資料を閲覧できる状態にしてくださっている。それに事前に目を通し見直しを持ってから講義を受けなければ、内容の定着は浅薄なものになってしまう。また、必要に応じて復習もしなければ、学校現場において生きて働く知識にならない。そのような意味において、自ら問いを立て、様々な考えや事実との対話を繰り返し、学びを広げ深めていくという主体性が大切であると実感している。

次に、環境や立場に関しては「常にフラット」であることを心がけるということである。学びに向かう姿勢としては、上も下もなく、ただ共に学ぶ仲間がいるだけだということである。同じ立場の現職院生の方々や、私の年齢の半分に満たないストマスの方々と机を並べて一か月経ったが、日々新しい気付きを得ていると共に、尊敬の念が日に日に増している。この仲間たちと共に同じ学校で勤務することができるならば、相当なことができるだろうとワクワクするのだが。

教職大学院生としての生活はまだまだ先は長い。日々の課題に追われているだけだと、あっという間に過ぎていってしまうのだろう。どこが自分のゴールなのかをしっかりと見据え、未来の自分に期待を持ち、仲間と一緒に学びの日々を過ごしていきたい。



飲んで迎えることのできた会

カリキュラム・授業開発コース
学部卒院生2年次 小林 亜莉亜

この度、教職大学院に入学された新入生の皆さんを迎える歓迎会を開催いたしました。企画班が中心となり、運営側は新たなスタートを切った新

入生の皆さんが、これからの学びを安心して進めていけるような温かい雰囲気をつくることを第一に考え、準備を進めました。教職大学院という環

境は、共に学び合い、高め合う仲間が存在がとても大切です。今回の歓迎会が、その関係性づくりの第一歩となればという思いが込められたものであったと実感しております。

当日は、院生・教員ともに多くの方に参加いただき、和やかで活気のある雰囲気の中で会を進めることができました。新入生や新しく加わった教員の方々からは、ご自身のこれまでの教職経験や、進学の実機、研究の関心などを語っていただき、これからの学びへの意欲が伝わってきました。同時に、私たちが在生にとっても、新たな視点や刺激を受ける貴重な機会となりました。会の中では、あえて形式ばらず、自由に交流できる時間を多めに設けました。そのおかげで、学年や専門分野を越えて活発な対話が生まれ、思いがけない共通点を見つけて盛り上がる場面もありました。研究テーマの話だけでなく、現場での教育実践や課題について意見交換する姿も多く見られ、まさに「学びの共同体」としての一体感が感じられました。秋田大学教職大学院は、高度専門職業人としての教員の養成を目的とし、理論と実践を往還しながら学ぶ実践的なカリキュラムを特色としています。「学び続ける教師」の育成を重視しておりますが、生涯にわたって成長し続ける力を育てる教育プログラムの始まりの日としてふさわしい、歓ばしい時間となりました。

これから切磋琢磨しながら学んでいく日々が始まります。歓迎会を通じて芽生えたつながりや絆を大切に、今後の研究や実践の中でお互いを支え合える関係を築いていきたいと思っております。今後も、こうした交流の機会を積極的に設けながら、よりよい学びの環境づくりに貢献していきたいと思っております。



教職大学院に入学して

カリキュラム・授業開発コース
学部卒院生1年次 林 佑果

教職大学院に入学して、あっという間に1か月が経ちました。私は約1年前、学部4年生の時に「学校現場に出る前に教師としての専門性を高め、自信を持って教壇に立ちたい」という思いから進学を決意しました。進学するか、学校現場で経験を積むか、たくさん悩んだ結果、学部時代の先輩

方のお話や説明会への参加を通して、ここで2年間学ぶことを志望しました。

大学院での日々は、想像以上に魅力的で刺激的です。その中でも、教職大学院に入学して良かったと感じることは大きく2つあります。

1つ目は、一緒に学ぶ方々の温かさです。4月当初は、どのような方々と出会い、どのように学び合うのか期待とともに少し不安もありました。しかし、新入生の歓迎会で教授や、現職の方々、同期の仲間と話してみたり、雄物ルームに所属したりしてからは、その不安はすぐに消えました。皆さまが優しく話しかけてくださったり自己紹介の際のユニークな小話を聴くことができたりしました。居心地がよく、これからの大学院生活に期待が膨らみ、嬉しくなったのを覚えています。温かく迎え入れていただき、自分もこの環境で成長したいという思いがより強まりました。

2つ目は、専門性の高い方々と共に学び合えることです。グループディスカッションや発表、互いのリフレクションへのコメントなど、どの場面においても皆さんの発言や考え方は新鮮で学びが多く、「なるほど」と感じる瞬間ばかりです。多様な視点に触れることで、自分の考え方の視野も広がり、ノートを取る手が止まらないほどです。

さらに、些細な疑問や相談してみたいことなど、いつでもだれに対しても安心して話すことができます。教授、現職の先生方、同期の仲間、自分を取り囲むすべての方々に本当に感謝しております。

これからの2年間、教職大学院で出会った方々への感謝と皆さんとのつながりを大切にし、自分の教師としての専門性を磨きながら様々な場面で学びを更新し続けたいです。



教職大学院での一か月を通して

発達教育・特別支援教育コース
学部卒院生1年次 藤原 宙詩

教職大学院に入学して一か月が過ぎた。この一か月を振り返ってみると、とても目まぐるしい日々だったと感じた。つい先日、学部を卒業したばかりの自分には目新しいことばかりで、新生活に慣れていくことに必死だったように思う。しかしながら、先輩方や現職の先生方のフレンドリーで温かな雰囲気に触れ、初めは緊張していたが、一か月が経った今ではとても居心地の良い環境になったと思う。また、学部卒院生の同級生の存在もとても支えになっている。学部の頃から親交があった人や大学院で初めて関わるようになった人などさまざまな人がいて、皆教職に対する熱意を持っておりとても感化される部分があるので、こ

れから切磋琢磨し合いながら実習や講義などに取り組んでいきたいと思う。

私が教職大学院に入学してよかったと感じたことが二点ある。

一点目は、現職の先生方と関わる点である。やはり、実際の現場で働いている先生方の視点というのは、とても勉強になるものばかりである。特に、授業実践や教師像などがとても明確で、講義内のグループワークでも毎回自分にとっての深い学びになっているように感じる。教職大学院にいるうちに、少しでも現職の先生方から多くのことを吸収していきたいと思う。

二点目は、より実践的な実習を行うことができる点である。学部時代の教育実習では、子どもと関わることも大切だが、授業実践のために日々実習に取り組んでいたように思う。しかし、教職大学院では長期的なスパンで実習校と関わっていくため、授業実践だけでなく、日頃の教員としての業務や、子どもへの理解を踏まえた上での授業づくりが望まれるように感じた。入学して一か月だ

と、まだ附属四校園の実習だけではあるが、特定校実習からは自分にとって実践的な関わりだけでなく、研究に沿った学びを得ることができるように努めていきたい。

まだ不安なことなどはあるが、より教職大学院のことに少しでも詳しくなることができるように日々を過ごしていこうと思う。

結びに

この度は、暁鐘の音第 35 号をご覧いただき、ありがとうございます。今回の 35 号では、教職大学院の一員として新たな季節を迎えた率直な感想、抱負や願いに焦点を当てて原稿を依頼させていただきました。今年度は、大学院を盛り上げるべく自分たちで様々な企画を考え、より一層賑やかな雰囲気でも過ごしている皆様の姿がとても印象的です。今後も学びや研究に勤しみつつ、各種イベントを通して皆様が笑顔で過ごすことができるように祈っております。

暁鐘の音 第 35 号 編集担当 渡部温子

